

た後、それを擁護し成就するにはどうすればよいか云ふことは問題としなかつたのである。急進的社會主義者は、總同盟罷工の必要を證明するために、議會が益々資本家の城塞となつて行く事實を指摘し、諸共和國のブルジョア・デモクラシーに辛辣な批評を加へて、議會政策の破産を示した。『資本主義的デモクラシー！』この議會制度を、勝利を得た労働階級の機關に變ずるの道如何？』といふ問が屢々起つたのも此頃のことである。西歐社會主義者の中で最も頭腦の明晰なアントン・パン、ネコツクは、此問に對して、労働者は資本主義國家の民主的形式を打破し、無産者革命の猛火の中に、労働階級の新しい權力機關を作らねばならぬと説いた。すると最も有力なマルクス主義者であるカウツキーは、パン、ネコツクを無政府主義者として批難した。是に對してパン、ネコツクは、資本主義的國家の用ゐる強制機關を廢滅しなければならぬといふことを明かにしたが、さてそれでは、無産階級が勝利を獲た上で、それを全うするためには、どういふ管理の機關を作らなければならぬかといふことは示すことが出来なかつた。

當時に在ては、革命的社會主義者でさへも、大多数はデモクラシーを以て社會主義實現の手段と考へて居つたが、デモクラシーが民衆を全然失望させた國々の革命的理論を代表してゐるサンデー、カリストは、労働組合が權力を掌握し、未來の社會を管理する中核であると主張した。

然し此問題に意を潜めたのは、少數の先覺者のみであつて、然も彼等でもこれに的確な解答を與へることは出来なかつたのである。歴史的解決は、決して労働運動の理論家に依て見出されるものでなく、たゞ民衆の革命的闘争の中にのみ見出されるものである。理論家の務めは、無産階級の實際運動の要領を掴んで、その智識を廣く普及し、階級闘争に於ける共通目的を意識させる一事に在るのである。

『五』 世界大戦の教訓

労働階級はどういふ統治機關を作つたらよいかといふ問題に實際に遭遇する前に、先づ其結束力が弱かつたことの軀骨を受けなければならなかつた。即ち彼等は大戦の慘禍を具さに嘗め、資本家のために命を流して、屍を山と積んだ後、始めて資本主義がいかに残忍無道な理窟を帯び、いかに文化的施設を破壊するか、いかに民衆を悲愴の淵に陥れ、いかに貧乏になつたのである。労働階級の前途の問題には、理論の域を脱して、最も深刻な、最も痛切な現實として感得されるようになったのである。

革命的社會主義者達の理論的宣傳も、様々の経験も、十九世紀末葉以來資本家のために蒙つた敗北も、労働者を階級に惰眠を貪らせた、此惰眠のお陰で上層労働者は極めて有利な境遇をから得た。又下級労働者は社會黨又は労働組合の官僚的な改良主義的幹部から離れて、又はその意思に反して革命的行動に出るには、餘りに無智、無力であつた。そこで久しく機を窺つてゐた戦争の惡魔が襲來してその戦慄すべき慘禍によつて、曾て革命的社會主義が説いた時、理解されなかつた教訓を、無産者に教へたのであつた。

この教訓を眞先に理解して、その當然の結論を受容れたのは露西亞の民衆であつた。露西亞革命は世界の大戦に對する民衆の最初の解答であり、國際的革命的先驅であつて、革命のスフィンクスが十九世紀の社會主義運動に與へた謎、即ち革命の實際の問題に對する解答であつた。露西亞の無産者は、その革命によつて社會主義を科學から實行へ進めた者であるが、是は同時に共產主義の科學にも一大進歩を劃することとなつた。共產主義とは労働階級の勝利の條件に關する學說である。ミコころがその條件は、労働階級が資本家階級に對して勝利を得て行く經過の中に、最も明白に現はれた。科學から實行へ共產主義が發達して行くには、露國革命を理解することが、まづ第一に必要なのである。

『六』 露國革命の教訓

(資本主義成熟の程度と社會主義革命の時機)

『社會革命は何時起るか』とは、労働階級の當面してゐる第一の問題である。社會主義の勝利は、生産力の發達次第